

# 意味用法別観点から見た第二言語としての格助詞「に」の使用調査

## — ブラジル人幼児2名の事例による予備的調査 —

久野 美津子

### 【要 旨】

本稿では、ブラジル人幼児2名の発話資料を基に、格助詞「に」の発達過程を明らかにするための予備的調査を行った。意味用法別観点から、(1)「に」の初出時期、(2)「に」脱落(\*φ)のみが観察される時期の有無、(3)誤りの特徴について調査した<sup>(1)</sup>。結果は、(1)意味用法の違いによって「に」の初出時期にも違いが見られた。比較的早期に使用されたのは「存在場所」「存在以外の場所」の「に」であった。(2)多くの用法で、「に」が出現する以前に、\*φのみが観察される時期があった。「場所」などの用法で「に」が使用され始めてからも、意味用法が異なる場合には、「に」を使えない時期が存在したことが確認された。(3)意味用法の違いによって、誤りの種類や特徴に違いが見られた。特に、「存在以外の場所」は、期間を通じて\*φの割合が高く、代用の誤りの種類も多かった。

### 【キーワード】

第二言語習得、格助詞「に」、意味用法、発達過程、ブラジル人幼児

## 1. はじめに

本稿は、ブラジル人幼児2名(男児Y、女児K)から得られた縦断的発話資料を基に、第二言語(L2)としての格助詞「に」の発達過程解明を目指して行った予備的調査である。ある言語を母語(L1)として習得する幼児には、言語能力の発達段階(developmental stages in first language acquisition)があることが知られている。また、L2習得の場合にも発達段階があり、学習者のL1の違いに拘らず、発達段階には類似した点が多いことも明らかになりつつあるという(白畑・富田・村野井・若林1999、Lightbown & Spada 1999)。「に」の意味用法には、場所、授受の相手、動作目的など複数あり、他の格助詞に比べ多岐に渡っている(小川・林他1982、益岡・田窪1987)。そのため、L2学習者の「に」の発達過程解明にあたっては、異なる意味用法ごとに「に」の使用状況を把握する必要があると思われる。そこで、本稿では、意味用法別の観点から「に」の使用状況を調査し、「に」の出現時期や誤りに何らかの違いが見られるのか、また、違いがあるとすれば、どのような特徴や傾向が見られるのかなどについて予備的調査をすることにした。

## 2. 先行研究概観

まず、L1先行研究について述べる。先行研究のうち、発達段階あるいは発達過程に言及している研究には、永野(1959)、横山(1989a、1989b)、白畑(2001)などがある。横山(1989a)は、幼児1名の10ヶ月から3歳3ヶ月までの観察記録を基に、様々な助詞について、正用と誤りの出現時期、使用回数などを調査した。そして、助詞の習得には「(第

一段階) 全く助詞が使えない段階」「(第二段階) 限られた発話の中で助詞を正しく使うことのできる段階」「(第三段階) 正用だけでなく、しきりと誤用も行う段階」「(第四段階) 全ての助詞が正しく使える段階」があると報告している。また、白畑 (2001) は、L1 幼児の連体修飾構造に関わる格助詞「の」の発達過程について、次のように述べている。最初に、「の」が発話されない段階 (発達段階一) があり、次に、「の」が発話され「名詞十の十名詞」が出現するが、同時に、正用と並行して、形容詞が名詞を修飾する場合にも過剰に「の」を使用する誤りが生じる段階 (発達段階二) がある。最後に、「の」の過剰使用が消失し、正しく「の」が使用できる段階 (発達段階三) があるとしている。これらの研究ではいずれも、まず、義務的生起文脈 (Obligatory Contexts, OC) で格助詞が発話されない段階がある点、次に、格助詞が出現し始めるものの、正用だけでなく誤りも観察される段階がある点で共通している。

次に、L2 先行研究について述べる。これまで、日本語の格助詞に関する研究は数多くされており、「に」に関する報告も多い (松田・斎藤 1992、久保田 1994、福間 1996、松本 1998、迫田 2001、野田・迫田・渋谷・小林 2001)。「に」の正用率や難易度などが、意味用法や述語の違いなどによって異なるという報告もある (八木 1996、生田・久保田 1997、今井 2000)。しかし、これらの多くは、横断的調査による資料に基づくもの、研究の主目的が誤用分析であるもの、複数の格助詞の使用状況を調査したものなどであり、縦断的調査によって「に」の発達過程の様子を詳細に記したものや、発達段階について述べている研究はそれほど多くないと思われる (久野 2003)。

L2 学習者を縦断的に調査し分析したものには、松本 (2000)、久野 (2003、2004) などがある。松本 (2000) は中国人児童 1 名を対象に、来日 2 ~ 100 週目に得られた発話資料や作文資料から、使用された助詞の種類や用法を調査した<sup>(2)</sup>。観察期間の対象児の年齢は 9 歳 4 ヶ月から 11 歳 3 ヶ月に相当する。松本 (2000) の発話資料の分析によると、意味用法別の「に」の出現時期は、早い順に「存在の場所」(13 週)、「動作の起こる時間」(22 週)、「到達場所」(24 週)、「最初 (最後) にあった場所」(49 週)、「動作のゴール」(60 週)、「受身の動作主」(75 週)、「状態動詞の主語」(79 週)、「目的」(81 週)、「役割」(100 週)であった。これに対し、「好意・悪意の出どころ」「使役の動作主」「決定した事項」「強い対比」の「に」は観察期間内に発話されなかったという。また、誤りについては、「に」が「で (動作場所)」「を (移動の範囲)」の代用として使用されている例や、本来「に (存在場所)」を使用すべき箇所で「の」が使用されている例などが報告されている。松本 (2000) の結果からは、「に」という一つの格助詞でも、意味用法が異なることによって、「に」が使用され始める時期に違いがあることがうかがえる。ただし、松本 (2000) では、用法の異なる「に」が初出以降、いつ頃、どの程度使用されているかなどの詳細は記されておらず、また、格助詞が脱落した発話は分析の対象に含まれていない。そのため、「に」の発達過程の詳細は明らかではない。脱落を誤りの一つであると捉えている研究や、発達段階の基準として捉えている研究は多い (横山 1989 a、松田・斎藤 1992、久保田 1994、白畑 2001) ことから、格助詞の発達過程を調査するには、格助詞が脱落した発話も調査対象として扱うことが必要であると思われる。

久野 (2003) はブラジル人幼児 2 名の 18 ヶ月間の発話データを基に、場所を表す「に」

「で」について発達過程の様子を記している。このうち「に」に関しては、最初にOCで「に」が発話されない段階が観察され、次に、正用「に」が出現するものの、同時に「に」脱落や他の助詞による代用の誤りも混在する段階が観察されていた。しかし、久野（2003）で調査対象とした「に」は「存在場所」のみであり、他の用法に関しては明らかではない。また、久野（2004）は、ブラジル人女児1名の18ヶ月間の発話資料を基に、様々な格助詞の使用状況を調査した。「に」に関しては、比較的早期から、「に」が正用あるいは他の格助詞の代用として多く使用されていたことが明らかとなった。誤りとしては、「に」の脱落、「に」の過剰使用、そして代用による誤りなどが観察された。そして、「に」の代用として用いられた助詞の種類は多岐にわたっていた。しかし、久野（2004）で調査した「に」は意味用法を考慮していないため、意味用法が異なる場合には、誤りの傾向に違いがあるのか、OC内において、まず「に」が発話されない時期があるのかなど、明らかでない点が多い。これらの問題点を踏まえ、本稿では（1）に示す点を主要課題としたい。

### （1）本稿の主要課題

- a. 意味用法の違いによって、「に」の出現時期に違いが見られるのか。
- b. 異なる意味用法ごとに、「に」の出現以前に、OC内でまず「に」の発話のない表現が観察されるのか。
- c. 意味用法の違いによって、誤りにも何らかの違いがあるのか。もしあるとすれば、どのような違いなのか。

以下では、これらの課題について調査していく。

## 3. 「に」の意味用法

本稿では、「に」の意味用法を表1のように分類した（小川・林他 1982、寺村 1982）。（Aa）の「存在場所」は「ある」「いる」などで表現されるもの、（Ab）の「存在以外の場所」は、「座る」「入る」「置く」などで表現されるものの場合である。（Ba）の「授受などを行う相手」には、「与える」表現（例：「あげる」「くれる」「見せる」など）の他、「受ける」表現（例：「もらう」「借りる」など）も含む（寺村 1982）。また、補助動詞として用いられる「～てあげる」「～てもらおう」などの表現も（Ba）に含める。（Bb）の「動作や態度の向けられる相手」とは、「会う」「言う」などで表現される場合である。

本稿では調査対象としなかった用法もある。1つ目は、「公園に行く」のように行先や方向を表す「に」である。この場合、「に」は「へ」の意味用法とも重なり、「に」と「へ」はほとんど区別無く使われるためである（小川・林他 1982、益岡・田窪 1987）。2つ目は、「茶碗がばらばらに割れた」のように、「ばらばらに」が結果の状態を示すのか、あるいは副詞的修飾語であるのか、その区別がつきにくい場合である（寺村 1982）。3つ目は、「私には車がある」のように「所有」を表す場合である。この場合、「私は車がある」と表現することも可能であり、また、一般的な日本語の初級テキストでも、「に」を用いない表現が見られる（石沢・豊田 1998）。このことから、対象児達から「所有」の「に」が発話されなかった場合、それらが正用法、会話における省略、理解できないことによる脱落のいずれ

であるのか判断しにくいと考え、本稿では対象外とした。4つ目は「時」を表す用法である。「時」についても、「～とき」「～ごろ」のように「に」の使用が任意のものがあるため、本稿では対象外とした。

表1 「に」の意味用法

意 味 用 法	用 例
(A) 場所	
a. 存在場所	教室に学生がいる。
b. 存在以外の場所	教室に入る。
(B) 相手	
a. 授受などを行う相手	友達に手紙を送る。／母に手紙をもらう。
b. 動作や態度の向けられる相手	人に会う。
(C) 変化結果	
a. 変える結果	息子を医者にする。
b. なる結果	水が氷になる。
(D) 目的	遊びに行く。
(E) 受身文の動作主体	先生に呼ばれた。
(F) 使役文の動作主体	子供に宿題をさせた。
(G) 基準や志向対象	注目に値する。
(H) 原因	恋に悩む。

## 4. 観 察

### 4-1 対象児

対象児は久野（2003、2004）の対象児と同様、ポルトガル語をL1とする、ブラジル人幼児2名（男児Y、女児K）である。彼らはブラジルで生まれ、その後、Y児が約2歳、K児が約1歳の時、両親と共に来日した。父親は片言の日本語しか話せず、母親は全く日本語が話せなかったため、家族間での会話は全てポルトガル語で行われていた。Y児が4歳7ヶ月、K児が3歳6ヶ月の時、静岡県掛川市内の保育園に入園した。入園当時、彼らは日本語が全く話せず、園内のブラジル人の友達との会話では、ポルトガル語を使用していた。幼児のL2学習者は語彙量や話の流暢さ等の点では成人に劣るが、文法の核となる部分においては、既に言語を一つ獲得している状態の学習者であると言われている（Crain & Lillo-Martin 1999）。実際、入園翌月に収集した対象児達の会話を調査したところ、例えば人称による動詞の変化、動詞の未来形や命令形などの複雑な活用に関する誤りは観察されたものの、日常会話は話せていたことから、本稿では彼らは既にL1を獲得していたものとみなした。性格はY児は恥ずかしがりやで、K児は非常に明るく活発であった。

### 4-2 観察方法

対象児達が保育園に入園した直後の2000年4月20日から、両親と共に帰国する直前の2001年12月25日まで観察を行い、最初の1年6ヶ月間に得られた資料を分析対象とした。

これはYが4歳7ヶ月から6歳1ヶ月まで、Kが3歳6ヶ月から5歳0ヶ月までの期間に相当する。観察は筆者が原則として1週間に1度保育園を訪問し行った。1回につきY、Kそれぞれ約60分間、発話や状況等を記録した。同時に発話は全てテープに録音し、後に文字化した。

調査項目は、表1に示した(A)～(H)の意味用法で用いられた発話である。本稿では、「に」が正しく発話されているものだけでなく、「に」が他の助詞によって代用されているものや、「に」が脱落したものも調査対象とした。「に」の用法のうち「存在以外の場所」では、「ここ座る」のように会話場面で「に」が省略されることもある(益岡・田窪 1987)。この用法で、仮に対象児が「に」を発話しなかった場合には、それが「に」の使用を理解した上での省略なのか、あるいは理解せずに脱落しているのかを判断することは難しい。そのため、会話場面で省略可能な「に」については、調査対象から外す方が適当であるとも考えられるが、実際に母語話者が、どの意味用法の場合にどの程度「に」を省略しているのかは、調査してみなければ分からない。したがって、本稿では、「存在以外の場所」も調査対象に含めるが、この用法は会話では一般に「に」が省略可能であるという前提のもとに調査をすることにした。

## 5. 観察結果と考察

調査の結果、観察期間内に観察されなかった意味用法があった。それらは、Y児では「目的」「基準や志向対象」「原因」「受身文の動作主体」、K児では「使役文の動作主体」「基準や志向対象」「原因」であった。以下では、これらを除く用法の「に」について結果を記す。表2はYの結果、表3はKの結果である。「に」が脱落しているものは便宜上「\*φ」で表した。表中の数字は発話回数である。各月の発話が、「\*φ」や代用による誤りを含めて6回以上観察された場合には、( )に%を記した。-は発話が観察されなかったものである。表中の、例えば「\*が→に」とは、誤って「が」を使用しているが、本来は「に」を使用すべきことを示す。また、Y児の「なる結果」には「ん」も観察されたが、「～になる」は「～んなる」と発話されることもあるため(鈴木 1978)、本稿では「ん」も正用とみなした。

以下では、両児の結果について、(1a)～(1c)であげた課題に沿って見ていく。

表2 Y児の意味用法別の「に」の使用状況

(A-a) Y児の「存在場所」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	12 (80)	6 (100)	-	2	8 (89)	6 (50)	7 (100)	6 (100)	-	8 (80)	3	3 (50)	8 (53)	9 (82)
に	-	3 (20)	-	-	-	1 (11)	3 (25)	-	-	-	2 (20)	-	3 (50)	7 (47)	2 (18)
*は→に	-	-	-	-	1	-	1(8)	-	-	-	-	-	-	-	-
*い→に	-	-	-	-	-	-	2(17)	-	-	-	-	-	-	-	-

(A-b) Y児の「存在以外の場所」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	3	11 (100)	11 (92)	5 (71)	11 (73)	36 (90)	6 (86)	23 (96)	17 (100)	25 (100)	15 (83)	17 (74)	30 (81)	41 (89)
に	-	-	-	1 (9)	1 (14)	3 (20)	-	-	-	-	-	3 (17)	3 (13)	3 (8)	3 (7)
*は→に	-	-	-	-	1 (14)	-	2 (5)	-	-	-	-	-	-	1 (3)	-
*へ→に	-	-	-	-	-	1 (7)	1 (3)	1 (14)	-	-	-	-	-	3 (8)	-
*で→に	-	-	-	-	-	-	1(3)	-	-	-	-	-	-	-	1(2)
*を→に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1(4)	-	1(2)
*ん→に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2(9)	-	-
*にの→に	-	-	-	-	-	-	-	-	1(4)	-	-	-	-	-	-

(B-a) Y児の「授受などを行う相手」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	-	-	2	-	3	-	2	-	1	3	-	5(56)	4	5(63)
に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4(44)	1	3(37)

(B-b) Y児の「動作や態度の向けられる相手」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	2	2	3	-	2	-	-	1	1	1	-	-	-	-
に	-	-	-	1	-	1	1	-	-	1	-	2	-	2	4

(C-a) Y児の「変える結果」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	1(17)	2(11)	-	-	-
に	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	5 (83)	16 (84)	1	3	6 (100)
*い→に	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
*に→φ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1(5)	-	-	-

(C-b) Y児の「なる結果」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	3 (43)	4 (36)	-	-	9 (69)
に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6(55)	-	-	1(8)
ん	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	4 (57)	1 (9)	2	2	3 (23)
*に→φ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-

(F) Y児の「使役文の動作主体」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表3 K児の意味用法別の「に」の使用状況

(A-a) K児の「存在場所」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	1	3	-	1 (5)	1	8 (23)	2	4 (24)	4 (29)	1 (5)	3 (16)	1 (14)	-	2 (6)
に	-	-	-	9 (75)	18 (95)	3	26 (74)	3	8 (47)	9 (64)	19 (90)	15 (79)	6 (86)	12 (80)	31 (86)
*で→に	-	-	-	1 (8)	-	-	1 (3)	-	5 (29)	1 (7)	1 (5)	1 (5)	-	1 (7)	3 (8)
*へ→に	-	-	-	2(17)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1(7)	-
*が→に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1(7)	-

(A-b) K児の「存在以外の場所」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	2	9 (100)	13 (28)	7 (11)	3 (30)	5 (18)	6 (26)	11 (26)	9 (41)	10 (21)	10 (38)	10 (37)	17 (44)	25 (33)
に	-	-	-	22 (48)	57 (89)	7 (70)	21 (75)	15 (65)	12 (29)	12 (55)	32 (68)	15 (58)	13 (48)	19 (49)	50 (66)
*で→に	-	-	-	4 (9)	-	-	-	-	18 (43)	1 (5)	-	-	3 (11)	1 (3)	-
*が→に	-	-	-	-	-	-	1 (4)	-	1 (2)	-	-	-	-	-	1 (1)
*へ→に	-	-	-	1(2)	-	-	-	-	-	-	-	-	1(4)	-	-
*にへ→に	-	-	-	5(11)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
*は→に	-	-	-	-	-	-	1(4)	-	-	-	-	-	-	-	-
*の→に	-	-	-	-	-	-	-	1(4)	-	-	-	-	-	-	-
*を→に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1(4)	-	-	-
*にを→に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5(11)	-	-	-	-
*から→に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1(3)	-
*い→に	-	-	-	1(2)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
*にに→に	-	-	-	-	-	-	-	1(4)	-	-	-	-	-	1(3)	-

(B-a) K児の「授受などを行う相手」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	1	-	-	1	1	4 (50)	-	1 (8)	2	3 (25)	2 (20)	2	1 (9)	4 (27)
に	-	-	-	-	3	-	2 (25)	5	10 (83)	1	9 (75)	8 (80)	3	10 (91)	11 (73)
*が→に	-	-	-	-	-	-	2(25)	-	-	-	-	-	-	-	-
*の→に	-	-	-	-	-	-	-	-	1(8)	-	-	-	-	-	-

(B-b) K児の「動作や態度の向けられる相手」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1(17)	-
に	-	-	-	-	1	1	1	2	-	-	3	3	-	5(83)	3

(C-a) K児の「変える結果」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	-	-	-	-	-	1 (4)	2 (20)	1 (12)	-	-	2 (9)	-	-	-
に	-	-	-	-	12 (100)	13 (100)	22 (96)	8 (80)	7 (88)	5	13 (100)	20 (87)	4	9 (100)	11 (100)
*に→φ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1(4)	-	-	-

(C-b) K児の「なる結果」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	-	-	-	-	2	1	4	1	-	1(8)	-	-	-	-
に	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	11 (85)	9 (90)	9 (75)	3	8 (73)
*に→φ	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	1 (8)	1 (10)	3 (25)	-	3 (27)

(D) K児の「目的」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	-	-	-	-	-	2	4	-	-	3	-	1	7(100)	1
に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	1

(E) K児の「受身文の動作主体」

滞在月数	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
*φ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
に	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-

### 5-1 「に」の初出時期

各意味用法における「に」の初出時期を見てみる。Y児の場合、早い順に、「存在場所」(5ヶ月目)、「存在以外の場所」「動作や態度の向けられる相手」(7ヶ月目)、「変える結果」(11ヶ月目)、「なる結果」(15ヶ月目)、そして「授受などを行う相手」(16ヶ月目)であった<sup>(3)</sup>。「使役文の動作主体」では「\*φ」は観察されたが、「に」は観察されなかった。一方、K児の場合、早い順に、「存在場所」「存在以外の場所」(7ヶ月目)、「動作や態度の向けられる相手」「授受などを行う相手」「変える結果」(8ヶ月目)、「なる結果」(12ヶ月目)、「目的」(14ヶ月目)、そして「受身文の動作主体」(15ヶ月目)であった。両児に共通していた点は(2)の通りである。

#### (2) 「に」の初出時期に関するY児とK児の共通点

- a. 「存在場所」「存在以外の場所」では、比較的早期に「に」が観察されていた。
- b. 「変える結果」と「なる結果」はいずれも「変化結果」であるが、「変える結果」の「に」の初出時期の方が早く、「なる結果」はそれより4ヶ月遅かった。
- c. 「目的」「受身文の動作主体」「使役文の動作主体」では「に」の初出時期が遅いか、あるいは「に」が観察されることはなかった。

これらの結果のうち、(2a)と(2c)については、松本(2000)の対象児における発話資料の場合と類似している。松本(2000)の結果では、「存在場所」の「に」の出現時期は、他の用法に比べて最も早期(来日13週)であった。また、松本(2000)では「受身文の動作主体」「目的」の「に」は比較的遅く(それぞれ75週、81週)観察され、「使役文の動作主」の「に」は観察期間中には使用されていなかった。本稿の結果も、K児の場合には「受身文の動作主体」「目的」の「に」の出現時期は比較的遅く(それぞれ15ヶ月目と14ヶ月目)、Y児の場合には、これらの用法で「に」は観察されなかった。そして、「使役文の動作主」の「に」は、Y児、K児のいずれからも観察されなかった。松本(2000)の対象児は中国語をL1とする小学生であり、本対象児達とはL1も年齢も異なるが、比較的早期に使用され易い意味用法や、逆に、使用されにくい意味用法が共通していたことは、興味深い点だと思われる。しかし、意味用法が異なることによって、なぜ「に」の出現時期にも違いが生じるのかについては、今後解明すべき課題である。

### 5-2 「に」が発話されない時期の有無

各意味用法において、「に」が使用される以前に、OC内で「\*φ」が観察されているかどうか見てみる。OC内で「\*φ」が最初に観察された時期と「に」の初出時期を記したものが表4(Y児)と表5(K児)である。

表4 Y児の「\*φ」の観察時期と「に」の初出時期(～ヶ月目)

	場 所		相 手		変 化		使役文 動作主
	存在	存在以外	授受	動・態	変える	なる	
「*φ」	5	5	7	5	7	11	17
「に」	5	7	16	7	11	15	—

表5 K児の「\*φ」の観察時期と「に」の初出時期（～ヶ月目）

	場 所		相 手		変 化		目的	受身文 動作主
	存在	存在外	授受	動・態	変える	なる		
「*φ」	5	5	5	10	10	9	10	13
「に」	7	7	8	8	8	12	14	15

まずY児の場合について述べる。Y児は、全ての意味用法において、「に」が観察される以前にOC内で「\*φ」のみが観察される時期があった。「存在場所」では、「に」と「\*φ」はいずれも5ヶ月目に観察されたが、「\*φ」の方が「に」よりも8日早く観察されていた。「存在以外の場所」「動作・態度の向けられる相手」「変える結果」「なる結果」では「\*φ」が観察されてから2～4ヶ月後に、「授受などを行う相手」では「\*φ」が観察されてから9ヶ月後に「に」が観察された。次に、K児の場合、「動作・態度の向けられる相手」「変える結果」では「\*φ」のみが観察される時期はなかった。しかし、「存在場所」「存在以外の場所」「授受などを行う相手」「なる結果」「目的」「受動文の動作主体」では、まず「\*φ」のみが観察され、その2～4ヶ月後に正用「に」が観察された。両児の「\*φ」のみが観察されていた時期の発話例を(3)(4)に記す。(3)はY児の発話例、(4)はK児の発話例である。例中の〈 〉内は発話時の様子、(に)は筆者が補ったもの、例の末尾の( )内は発話時期である。

(3) Y児の発話例

a. 「動作・態度の向けられる相手」

〈意地悪をする子に対して〉 \*せんせい (に) ゆーっちゃった。(6ヶ月目)

b. 「授受などを行う相手」

\*ティッシュ シホちゃん (に) いっこ あげる。(13ヶ月目)

c. 「使役文の動作主」

〈高く積んだ積木を倒させて欲しい〉 \*ぼく (に) おして やらせて。(17ヶ月目)

(4) K児の発話例

a. 「授受などを行う相手」

〈滑り台を独り占めしている子に〉 \*ヤンカちゃん (に) かして。(5ヶ月目)

b. 「なる結果」

\*ヤンくんも みずぼうそう (に) なっちゃった。(11ヶ月目)

c. 「受身文の動作主」

\*だって せんせい、っこ、おこらーる、せいせい (に) おこられる。(13ヶ月目)

「\*φ」のみが観察されていた時期に、彼らは「に」という音形を全く知らなかったかと

言えば、必ずしもそうではない。なぜなら、彼らは5～7ヶ月目に「存在場所」あるいは「存在以外の場所」として、正用「に」を使用していたからである。しかし、5～7ヶ月目以降であっても、Y児の場合には、例えば、「授受などを行う相手」の7～14ヶ月目、「なる結果」の10～14ヶ月目に、また、K児の場合には、「なる結果」の9～11ヶ月目、「目的」の10～11ヶ月目に、「\*φ」のみが観察される時期があった。また、会話場面で一般に「に」の省略が可能とされるのは、本稿で扱った意味用法のうち「存在以外の場所」だけであり、それ以外のものに関しては、彼らが「に」という音形を耳にする機会があったと考えられる。これらの点を考慮すれば、彼らは「に」という音形の存在に気づきながらも、異なる意味用法の当該箇所では「に」を使うことができなかつたと推測される。したがって、全ての場合とは限らないが、異なる意味用法ごとに、まず「に」が使えない段階があるのではないかと予想される。

### 5-3 誤りの種類と特徴

両児の誤りには、「\*φ」、他の助詞による代用の誤り、そして、本来「に」を必要としない箇所では「に」を使用する過剰使用の誤りなどが見られた。Y児とK児の誤りの種類を記したものが表6である。

表6 Y児とK児の誤りの種類

	場 所		相 手		変化結果		目的	受身	使役
	存在	存在以外	授受	動態	変え	なる			
Y児	φ、は、 い	φ、は、へ、で、を、ん、にの	φ	φ	φ、い、 過剰	φ 過剰	/	/	φ
K児	φ、へ、 で、が	φ、は、へ、で、を、の、が、 い、にへ、にを、から、過剰	φ、 が、の	φ	φ、 過剰	φ、 過剰	φ	φ	/

誤りを種類ごとに見ていくと、まず、「\*φ」の誤りは、両児とも全ての意味用法で観察されていた。Y児の場合、特に「存在以外の場所」で「\*φ」が多く観察され、その割合は7ヶ月目に「に」が出現してからも、毎月70%以上であった。また、Y児はこの他にも「存在場所」「授受などを行う相手」などで、観察期間を通じて「\*φ」の割合が比較的高かった。一方、K児の場合にも、Y児同様「存在以外の場所」での「\*φ」の割合が比較的高く、15ヶ月目以降でも毎月30～40%台であった。

次に、代用の誤りについては、代用として使用された助詞の種類数が、意味用法によって異なっていた。助詞の種類が最も多かったのは、両児共に「存在以外の場所」であり、Y児は「は、へ、で、を、ん、にの」の6種類、K児は「は、へ、で、を、の、が、い、にへ、にを、から」の10種類であった。これに対し、他の意味用法では、代用の助詞の種類が少ないか、あるいは、観察されなかつた。

過剰使用の誤りは、Y児では「変化結果」の用法で、K児では「変化結果」「存在以外の場所」の用法で観察された。「変化結果」では、例えば「かわいくなる」や「音を小さくする」とすべき箇所では、「\*かわいいになる」「\*小さいにする」のように「に」を使用する発

話が観察された。以下に代用や過剰使用の誤りの発話例を記す。(5)はY児の、(6)はK児の発話例である。

(5) Y児の代用や過剰の誤りの発話例

- a. \*こっち こっち すわって こっちは (→に)。 (8ヶ月目)
- b. \*おーちた、したで (→に)。 (10ヶ月目)
- c. 〈ミサイルが〉\*マイちゃんを (→に) あたりまーす。 (16ヶ月目)
- d. 〈カセットテープの音の大きさを〉\*ちいさいに(→φ) する。 (15ヶ月目)

(6) K児の代用や過剰の誤りの発話例

- a. \*かわいいに (→φ) なっちゃった。 (12ヶ月目)
- b. 〈紙を牛乳の中に入れてながら〉\*ここにを (→に) 入れて、これを・これをね、んとね、やって、はいってません。 (14ヶ月目)
- c. \*ママね ここにに (→に) ね つめたい ことおり (氷) を 入れた。 (17ヶ月目)
- d. 〈絵本を見ながら〉\*おいけが (→に) はまっちゃったーね。 (18ヶ月目)

以上のことから、意味用法の違いによって、誤りの傾向にもいくらか違いが見られることが分かった。両児共に、「変える結果」「動作や態度の向けられる相手」などでは、期間を通じて誤りが比較的少なかった。これに対し、両児共に、「存在以外の場所」では「\*φ」の割合が高く、代用の誤りの種類も多かった。このように、「存在以外の場所」で多くの誤りが観察された一因としては、この用法では「入る」「座る」「置く」など様々な動詞が用いられることや、会話場面で「に」が省略される場合が多いことなどから、対象児達が、本来使用すべき格助詞が何なのか明確には認識できていなかった可能性が考えられる<sup>(4)</sup>。

## 6. おわりに

本稿の課題((1a)～(1c))について、主な結果をまとめる。まず、課題(1a)に関しては、意味用法の違いによって「に」の初出時期にも違いが見られた。「に」の初出時期は両児共に、「存在場所」「存在以外の場所」では比較的早かったのに対し、「目的」「受身文の動作主体」「使役文の動作主体」では比較的遅いか、あるいは「に」が観察されなかった。また、「変化結果」では、両児共に「変える結果」と「なる結果」とで「に」の初出時期に差があり、「なる結果」の方が4ヶ月遅かった。次に、課題(1b)に関しては、OC内で「に」が出現する以前に「\*φ」による表現が、Y児の場合には全ての意味用法で観察され、K児の場合には「動作や態度の向けられる相手」「変える結果」を除く用法で観察された。両児共に、正用「に」は場所を表す用法として5～7ヶ月目に観察されていたことから、「に」という音形の存在には早期から気づいていたと思われる。しかし、様々な意味用法のOC内で「\*φ」のみが観察される時期が確認されたことから、対象児達は「に」という音形を知ってはいたものの、それを当該箇所で使用できない時期があったと考えられる。最後に、課題(1c)に関しては、意味用法の違いによって、誤りにもいくらか異なる

る傾向が見られた。両児共に、期間を通じて誤りが少なかったのは「変える結果」「動作や態度の向けられる相手」であり、これらは観察期間の終わり頃には、誤りも観察されなくなった。これに対し、期間を通じて比較的誤りが多かったのは「存在以外の場所」であり、「\*φ」の割合が高く、代用の誤りの種類も多かった。この用法では、使用される動詞の種類も多く、会話場面で「に」が省略されることも多い。そのため、対象児達は、本来使用すべき格助詞が何なのか、明確には認識できていなかった可能性も考えられる。

今後は、日本人母語話者が会話場面で「に」をどの程度省略しているのか、また、L1転移の影響の可能性がどの程度あるのかなども考慮しながら、意味用法の異なる「に」について、それぞれの発達段階をより詳しく調査していく必要があると思われる。

## 注

- (1) 表記に関して、当該文脈での不適格な表現には(\*)を付した。
- (2) 松本(2000)は助詞の分類方法に関して、Jorden and Noda (1987) *Japanese: The Spoken Language Part, 1, 2, 3*, 及び筑波ランゲージグループ(1992)の *Situational Functional Japanese Vol. 1, 2, 3* を参考にしたと述べている。
- (3) ここでは、Y児の「なる結果」で観察された「ん」は考慮していない。以下でも同様である。
- (4) 「に」を使用すべきことを認識した上で省略していた可能性も考えられるが、それがどの程度の割合であったのかについては把握できない。

## 参考文献

- (1) Crain, S. & Lillo-Martin, D. (1999) *An Introduction to Linguistic Theory and Language Acquisition*. Oxford: BLACKWELL.
- (2) 福間康子(1996)「作文から見た初級学習者の格助詞「に」の誤用」『九州大学留学生センター紀要』第8号 pp.61 - 74
- (3) 久野美津子(2003)「ブラジル人幼児の場所表現「に」と「で」の習得過程」『日本語教育』117号 pp.83 - 92
- (4) 久野美津子(2004)「第二言語としての日本語格助詞の習得過程解明をめざして—ブラジル人幼児の事例における予備的調査—」『静岡大学留学生センター紀要』第3号 pp.15 - 30
- (5) 生田守・久保田美子(1997)「上級学習者における格助詞「を」「に」「で」習得上の問題点—助詞テストによる横断的研究から—」『日本語国際センター紀要』第7号 pp.17 - 34
- (6) 今井洋子(2000)「上級学習者における格助詞「に」「を」の習得—「精神的活動動詞」と共起する名詞の格という観点から—」『日本語教育』105号 pp.51 - 59
- (7) 石沢弘子・豊田宗周(監修)(1998)『みんなの日本語初級I本冊』スリーエーネットワーク
- (8) 久保田美子(1994)「第2言語としての日本語の縦断的研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号 pp.72 - 85

- (9) Lightbown, P. M. & Spada, N. (1999) *How Languages are Learned, Revised edition*. Oxford: Oxford University Press.
- (10) 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版
- (11) 松田由美子・斎藤俊一 (1992) 「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』第2号 pp.129 - 156.
- (12) 松本恭子 (1998) 「ある中国人児童の助詞の使用実態: 1年間のケーススタディーを通して」『ジャーナルCAJLE』2 カナダ日本語教育振興会 pp.24 - 38
- (13) 松本恭子 (2000) 「ある中国人児童の来日2年間の助詞機能の使用状況—発話資料と作文資料の縦断調査報告—」『日本語教育論集』16号 国立国語研究所 pp.1 - 22
- (14) 永野賢 (1959) 「幼児の言語発達について—主として助詞の習得過程を中心に—」『ことばの研究』国立国語研究所 pp.383 - 396
- (15) 野田尚志・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- (16) 小川芳男・林大・他編集 (1982) 『日本語教育事典』大修館書店
- (17) 迫田久美子 (2001) 「学習者の誤用を生み出す言語処理のストラテジー(1)—場所を表す「に」と「で」の場合—」『広島大学日本語教育学研究』第11号 広島大学教育学部日本語教育学講座 pp.17 - 22
- (18) 白畑知彦 (2001) 「普遍文法の視点」青木直子・尾崎明人・土岐哲 (編) 『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社 pp.120 - 135
- (19) 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (1999) 『英語教育用語辞典』大修館書店
- (20) 鈴木忍 (1978) 『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法 I 助詞の諸問題 1』国際交流基金、凡人社
- (21) 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- (22) 八木公子 (1996) 「初級学習者の作文に見られる日本語の助詞の正用順序—助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に—」『世界の日本語教育』第6号 pp.65 - 81
- (23) 横山正幸 (1989a) 「幼児による助詞の誤用の出現時期と類型」『福岡教育大学紀要』第38号、第4分冊 pp.225 - 236
- (24) 横山正幸 (1989b) 「幼児による格助詞ニの誤用について」『日本心理学会第53回大会発表論文集』pp.801

The use of case marker *ni* as a second language in view of meanings  
— A preliminary investigation of two young Brazilian children's case —

HISANO, Mitsuko

This thesis is a preliminary investigation of the acquisition of the case marker *ni* by second language (L2) learners. It is based on the data obtained when monitoring the spontaneous speech of 2 Brazilian children. This investigation of the L2 learners is focused on the following: (1) When *ni* first appeared in their speech, (2) Whether they used the case marker or not (and when this occurred), (3) The frequency of their errors. *Ni* can be used in several different senses, different results were observed for the various uses of *ni*. Thus, for this paper *ni* has been categorized according to meaning. The results are as follows: (1) When *ni* first appeared differs among the categories. *Ni* in the “locations” category appeared earlier. (2) The inability to use the case marker was found in many categories. Even after *ni* was used for the “locations” category, the subjects could not use *ni* in other contexts. (3) The frequency of errors varied among groups. In the “locations” category (except “location of being”), there were such errors as omitting *ni*, and, furthermore, substituting many other kinds of other case markers in place of *ni* throughout the observation.